

初代都一中の研究

諏訪 春 雄

— その一 —

始めに

初世都太夫一中、いま通説^{註1}とされるものによってその経歴を記せば次の通りである。

彼は、京都の本願寺派明福寺住職周閑の弟で恵俊といった。周閑の没後、実子がなく、恵俊が一時僧職を継ぐが、間もなく弟に僧職をゆずり、還俗して、須賀千朴と名告って音曲の道に入った。寛文十年、一中二十一歳の時という。師は後の都万太夫すなわち都越後掾なので、間もなく須賀千朴を都太夫一中と改めた。この初世一中が一流を樹立した年代は明らかでないが、初めは座敷芸であり、宝永四年（厳密には宝永三年十一月の顔見世より、筆者注）、大坂の片岡仁左衛門座に出演して「京助六心中」の出語りを勤めたのが芝居に出演した最初らしい。時に一中は五十八歳であった。彼の活躍期は、十八世紀の初期（宝永、正徳ごろ）で、正徳五年と享保三年の二回江戸に下って市村座に出演している。享保九年に初世一中が没し、その後の一中節は京坂と江戸の両方にわかれて芸脈がつづいた。

これに、更^{註2}におぎなえば、彼の法名は周可、明福寺の第五世を襲いだが、二十一歳の時還俗して船頭町に住み、山本土佐掾に学び、文弥節・治太夫節等の長所を採って一流を語り出した。受領して都和泉掾（一説に但馬掾）橘盛安と号す。正徳五年十一月江戸に下り、市村座の顔見世狂言「万歳女鉢木」に「笠物狂」（お夏清十郎）と「最明寺

入道」を、翌春は信田の小太郎雪中の道行を語って好評を得た。剃髪後、千翁。享保九年五月十四日京都で没した。

以上のような通説を形成する上の重要な資料の一つは『声曲類纂』である。同書の京都太夫一中の記述を見れば、これまで記した通説中の明福寺関係の事項や生没年を除き、現在知られる初世一中伝の大綱が大体備わっていることが明らかとなる。これにつけ加えられるもう一方の資料が、京都御池通堺町に現存する真宗明福寺から出た過去帳や一中肖像で、大正十一年の一中の二百年忌を記念して、『一中発祥地』（瀬川露城著）という小冊子が出されて、過去帳を中心とする資料が発掘された。その後も、同寺蔵の一中肖像の下画も見え、一中の生没年推定の手掛りが得られることになって、現在の一中伝が形成された。

しかし、一中の伝記に関してはまだ不明な点が多く残されている。前述の通説中でも、都越後掾と山本土佐掾の両説が対立しているようにその師承関係が明らかでなく、宝永年中に歌舞伎に出語りをして登場するまでの経歴が闇に包まれていることなどがその主要なものであるが、殊に、彼を文学史、邦楽史上の史実として定着させようとする場合に、その流派の語物の範囲と内容の究明が不充分なことは大きな障害となっている。しかも、これまでの通説を形成する前記二種の資料も改めてその信憑性が吟味し直される必要がある。

これらの問題を解決する為には、彼の語物が徹底的に博搜され、紹介される必要があり、その方の試みも二、三これまで認められるが、何れも充分とは言いかねる。

筆者は、ここ数年、機会ある毎に初代一中の語物の蒐集を心掛けてきたが、この問題にのみ集中して専念した訳ではなく、極めて不十分な段階に止まっている。従って、本稿はあくまでも未定稿の中間報告にすぎない。しかし、一中と近松、一中と歌舞伎、他流派の語物との交渉など、一中を通して究明されなければならぬ課題は多く、この中

間報告もまた幾分かの意義があるはずである。

注1 『演劇百科大事典』中の「一中節」の項（吉川英史解説）。

注2 『日本文学大辞典』中の「一中節」の項（黒木勘蔵 秋葉芳美解説）。

注3 忍頂寺務『近代歌謡考説』所収の「一中節の古板本に就て」。英十三『一中節』。千葉胤男「一中節と現存古曲の考察」（NHK放送文化年報12）。

一 初代一中の語物

初代一中の語物は、一曲としてのまとまりを持つ(イ)丸本、各段の独立した段物を集めた(ロ)段物集、各段が分離して板行された(ハ)正本、当時の流行歌謡集中に他流の語物と共に収録された(ニ)語物、更に、以上四種とやや性格を異にするも、一中が出語りした際の歌舞伎の(ホ)絵入狂言本の五種に大別できる。以下、順を追って私の寓目したこれらの諸本について記述しよう。

(イ) 丸本

助六心中並せみのぬけがら

二段。十行（道行部分は九行）十二丁。東洋文庫蔵。この系統に属するものに、東京大学国文研究室、大阪大学国文学研究室、国立国会図書館等所蔵の十行（道行部分九行）十一丁、ゆしま天神女坂さかみや版や、東京大学霞亭文庫所蔵の十行九丁本の宮古路豊後正本などがある。宝永三年十一月大坂の片岡仁左衛門座上演の「京助六心中」に一中が浄瑠璃で道行を語っている（『役者友吟味大坂』）ので、これ以前の成立になる。

注 信多純一「助六心中浄瑠璃の初演とその意義―切浄瑠璃と世話物の問題―」（『国語国文』31巻四号）参照。

助六心中 せみのぬ
けがら

六段。絵入細字本。奥付に「右此本者太夫一中直之正本ヲ写シ令板行者也／享保^{丙午}十一歳正月吉日／あさくさみつ
けまへどうぼう丁／いづみやこん四郎板元」とある。『世話浄瑠璃大全上巻』（水谷不倒）所収。前掲「助六心中並
せみのぬけがら」の系統を引き、江戸版の六段物に改めたもの。原本所在不明。

助六
後日 傾城おかた成

三段。八行二十五丁半。京都正本屋山本六兵衛板。題簽に「^{後日}助六傾城おかた成／都太夫一中／^{作者}佐渡島三良左衛
門」。内題「けいせい内房成^{おみなう}作者 佐渡島三良左衛門」。刊記に「右此本太夫直之以正本令改板者也／都太夫一中／
^{作者}佐渡島三良左衛門／錦小路通堀川東へ入町／正本屋山本六兵衛板」。最後の部分に近松の「冥途の飛脚」新口村
の場面の影響が認められるところから、この書を世に紹介された水谷不倒氏は、「冥途の飛脚」上演の正徳元年以降の
成立と推定している。後に述べる正徳元年成立の「正徳元年一中節段物集」（仮題）にその道行文が収められている
ので正徳元年中の成立となるか。ただし、「助六心中後日」の改題本とすれば、その成立はもう少し降る。次項参照。
『歌舞伎研究第廿七輯』に水谷不倒氏によって紹介される。東京芸術大学に旧渡辺霞亭氏所蔵本の影写本が存在する。

助六心中後日

三段。十二行十四丁。内題「助六心中後日^{作者} 佐渡島三良左衛門」。奥書欠。二丁ウから三丁オにかけて見開き全
面の挿絵。右上段に都太夫一中の出語りの図。ツレ菅野宇太夫、ワキ松本源太夫、しゃみせん彦兵衛とあり。本書
は、水谷不倒氏が『歌舞伎研究第廿七輯』に紹介している「^{後日}助六傾城おかた成」の本文、及び、東京芸術大学所蔵影写
本と比較すると、全くの同一文で、その改題、改板本であることが知られる。しかし、「^{後日}助六傾城おかた成」の刊記

に「右此本太夫直之以正本令改板者也」とある文句を信じれば、「助六心中後日」の方が先行するか。とすれば、本書の成立は正徳元年中で、「後日助六傾城おかた成」はその改題本となる。天理大学図書館所蔵。

梶久末松山

上中下三巻。十行十丁。山本九兵衛板。奥付に「右此本は太夫ちきの正本をもつて板行／致し候されば初心稽古のためこと／＼／かながきにしてふししやうくきり三味線の／のりかたほとひやうし三重おくりのしな／＼／ひみつを残さずあらはして板行者也／山本九兵衛板」とある。早稲田大学演劇博物館蔵。他に、内題に「わんそくす梶久末の松山 都太夫一中直正本」と記す八行本も存在する（『日本名著全集浄瑠璃名作集上』解説）。この作と紀海音の「梶久末松山」とは、筋、文章に類似する箇所が多く、その成立の前後に関して両説がある。海音の「梶久末松山」の上演年は明和版『外題年鑑』に宝永五年上場と記されている。この説をそのまま認める黒木勘蔵氏は海音作先行説をとり（『日本名著全集浄瑠璃名作集上』）、やや成立年をずらして宝永末か正徳頃の上演と考える祐田善雄氏は、一中作先行説をとっておられる（『紀海音の著作年代考証とその作品傾向』『国語国文』巻六の七、八）。最近紹介された『鸚鵡籠中記』によれば、宝永七年の四月に豊竹座で「梶久」が上演されている。一方、後に述べる如く、宝永七年頃出版の一中節段物集「新道行揃」に「わん久道行」が載っているもので、その頃までに一中節の「梶久末松山」の成立していた事は確かであり、また、その本文中に宝永六年京柳山座上演の「巖島姫滝」に一中が語った「山めぐり」の名が見えるので、宝永六年末か、宝永七年中の成立ということになる。恐らくは、海音作に先行するものか。

八百屋お七物語

二段。十行十丁本。内題「八百屋お七物語 都太夫一中直伝」。題簽、中央に大きく「八百屋お七」、右に「評判

の物がたり」、左に「道行ふし付都太夫直正本」、上段に見合に向う太夫の姿、その右に「都浄るり」、左に「都一中」、下段に「ふ屋町通／八文字屋／八左衛門」と三行に記す。二丁オ三丁ウに見開き全面の挿絵。東洋文庫所蔵。『稀書複製会第六期』所収。本書の成立について、『稀書複製会』の解説は、宝永五年以降正徳年間かと推定している。その根拠は、宝永五年春に江戸で「八百屋お七」の歌舞伎が興行されていること、正徳五年に一中が江戸へ下っていることにあるが、やや信憑性の薄い説といふべきであろう。この「八百屋お七物語」最後の「八百屋お七道行」は前述宝永七年頃成立の「新道行揃」に収められているので、宝永七年以前の語物と見てよからう。上限は、本作に用いられている趣向が、宝永三年以降大坂を中心として起る歌舞伎の八百屋お七劇ブームとの関係が認められるので、宝永三年と押さえておいてよからう。

一中の丸本として現存するものは以上の六種である。宝暦版の『外題年鑑』は、都太夫一中の語物として、「伝授小町」「万屋助六心中」「梶久末の松山」「菜種の花盛」「辛崎浪枕」「彦三近江八景」「愛染明王影向松」「おしゅん 伝兵衛」川原の心中」の八曲をあげ、『声曲類纂』もまたこれを受けついで、山本土佐掾の芝居で語ったものとして、この八曲を挙げている。これらのうち、現在、丸本の存在の不明なものは、「伝授小町」「菜種の花盛」「辛崎浪枕」「彦三近江八景」「川原の心中」の五曲である。

(ロ) 段物集

次に段物集の方を見よう。一中節の段物集としては、『日本歌謡集成巻十』や『徳川文芸類聚第九』に収める旧刻「都羽二重拍子扇」が流派の語物五十番を集めて著名であるが、初代以降の語物をも多く含むので、ここでは、まず、初代一中生存時代の段物集から触れていこう。

新道行揃

英十三氏が『酒中花』（第二巻三号、昭和六年七月）に最初に紹介されたが、題簽を欠くために書名が判明しなかったものを、その後、忍頂寺務氏が、表紙見返しに題名を記す別本を入手され、『陳書』（第六号、昭和十一年四月）に詳細に記述された。本書の所在が現在不明なので、忍頂寺氏の記述によって次に記す。

半紙本一冊。紙数二十六丁。表紙見返しは、中央に大きく「新道行揃」と記し、上部は、黒地に白抜き「千」の紋を中に、右に「都太夫／一中節」、左に「大字けいこ／ふし付口伝本」とあり、下部左に「正本屋勘兵衛板」とある。これをはさんで、両側に上下二段に分けて十九章の曲目を掲げてあるが、本文と対比すると本文には「しゆきやうねん仏」の一章が不足している。本文は次の十八章を収めている。

かぐら高さご　ゆうし桜つくしなら土産名所記　ゆうしの三つ物姫君薄雲道行　助六道行せみのぬけがら　助六かわり道行　姫が滝四季の山めぐり　姫が滝水の上風流　かはり山めぐり（ちや屋めぐりやつし）諸見せ物めぐり
京三十三所観音めぐり 評判のおみつ
紙屋兵衛 合逢から傘三本足道行　わん久道行　八百やお七道行　かるためぐり　庚寅たからごよみ　四条やく者めぐり　三まいめぐり　しのゝめ道行

末尾の奥付には「右此本は太夫ちぎの正本をもって板行致し候されば初心稽古のためこと／＼／くかながきにしてふししやうくきり三ノ味線ののりかたほどひやうし三重おく／りのしな／＼／ひみつを残さずあらはして／板行者也／御幸町通五条上ル町／正本屋勘兵衛板」とあるという。

本書の刊行年は不明であるが、「庚寅たからごよみ」という暦浄瑠璃の存在によって、宝永七年中の成立とみてよからう。現在知られる一中の段物集中最古のものとなる。

正徳元年一中節段物集（仮題）

半紙本一冊。替表紙。題簽欠。八行、九行、十行、十一行二十二丁。内容は次の通り。

「辛卯福徳曆 都太夫一中正本^{八丁}」「枕づくし 都太夫一中正本^{三丁}」「わん久道行 都太夫一中正本^{八丁}」「助六あげ巻二度心中道行^{二丁}」「姫が滝四季の山めぐり 都太夫一中直正本^{十丁}」「姫が滝水の上風流 都太夫一中直正本^{十丁}」「色道^{しきどう}仙人茶屋めぐり^{せんぢや} 都太夫一中正本^{十丁}」「京三十三所観音めぐり ふし付^{三丁}」「みやこ大めぐり ふし付^{十丁}」「四季鳥めぐり ふし付^{十丁}」「酒山めぐり ふし付^{九丁}」「八百屋お七みちゆき 都太夫一中正本^{十丁}」「けいせいしのぶ草 都太夫一中正本^{十丁}」「島づくし 都太夫一中正本^{十丁}」「鎧曾我形見^{よろひそががたみ}おくり 都太夫一中正本^{十丁}」「五段曾我んぶくしゆすびん^{七行}」「勇士の三つ物^{うすぎ}うすぎ道行 都太夫一中正本^{十丁}」「松つくし 都太夫一中正本^{十丁}」

以上の十八章。裏表紙オの識語に「辛卯 正徳元年也 二十二丁／板元 吉野屋カ」とある。

本書も刊記を欠く。「辛卯福徳曆」という曲の存在により、正徳元年中の成立となるが、「助六^{助六}傾城おかた成」や「助六心中後日」の項で述べたように、近松の「冥途の飛脚」の影響の認められる「助六あげ巻二度心中道行」を収めるので、明和版『外題年鑑』により同年三月五日初日とされる「冥途の飛脚」の上演後の成立となる。大阪大学所蔵。

都一中乱曲集

半紙本一冊。二十五丁。町田博三著『江戸時代音楽通解』に表紙見返しの影響、樋口素董著『一中譜史』に同じ箇所を模刻を掲載するので、それによって次に記す。上段に一中出語りの図、中央に「一中上りかたる」、右に「な

「甲午玉福貞曆」
ねんぎやくふしきよる

作者 菅野宇太夫八行

「助六道行

太夫ふし付九行

「かぐら高砂

都太夫一中正本二行

「枕づく

し 都太夫一中正本八行

「わん久道行

都太夫一中正本八行

「富貴曾我五月御前道行

正本八行

「おなつかさ

物ぐるひ道行二行

「半七三かつ心中道行八行

「姫が滝四季三

の山めぐり

都太夫一中正本十行

「姫が滝水の上風

流 都太夫一中直正本十行

「八百屋お七みちゆき

都太夫一中正本十一行

「島づくし

都太夫一中正本十行

「鑑曾我形見よるなまがたみおくり

都太夫一中正本約二丁半

「五段曾我げんぶくしゆすびん七行

「けいせいしのぶ草

都太夫

一中正本九・十行

「ゆうし桜づくしなら土産名所記

都太夫八行

「石垣風流茶屋名よせ

都太夫一中正本十行

「都ふろ屋の名よせ

都太夫一中正本十行

「北野あんどう茶屋名よせ

都太夫一中正本十行

「しのゝめ道行

ふし付九行

「一丁半

刊年を欠くが、冒頭の暦浄瑠璃の「甲午」は正徳四年に当るので、この年の刊行であらう。同浄瑠璃の詞章にも「正徳四年とあける春」の文句がある。大阪大学所蔵。

千朴秘曲集

半紙本一冊。本文七十二丁（但し白紙二丁分）。奥付半丁。表紙見返しに忍頂寺氏の筆跡で次の識語「『千朴秘曲集』は半紙本一冊、都太夫一中の稽古本にて、吉野屋源兵衛の板、丁数／七十一丁、四十四章を納む、之を『都羽二重拍子扇』と対比するに、四十四章／の中、同書にあるもの三十九章、同書に無きもの左の五章なり／○角田川月見の船 ○もんさく末社名よせ／○石垣新船茶屋名寄 ○都風ろ屋の名よせ／○都のいぬい色すだれ／末尾広告により本書は二巻を合本せしものと推せらる、又、本書を『都千朴拍子扇』と対比するに、同書に有るもの／同じく三十

九章、同書に無きもの前記五章なり、」がある。奥付「此度千朴秘密の淨瑠離品々取合上中下三卷に閉致／大字稽古本板行仕候先二卷出来仕候ニ付広メ申候残一卷は／追付出し申候今迄有来リ候板行本数多有之といへ共実直ノ／正本ならざる故文[㊦]節章あやまり多し依去此度太夫／直之正本直之以校合三味線のりかた程拍子を改正し千朴／秘曲集と題号し梓にちりばめ世にあまねく広むる者也／都太夫一中／京／六角通新町西入町／直之正本所／吉野屋源兵衛板」。これによって、本書が「千朴秘曲集」と命名されていたことがわかり、また、二卷合本とする忍頂寺氏の推定も肯定される。内容は次の四十四章。

「富貴曾我 助時宮めぐり^{九行}」「富貴曾我五月御前道行 正本^{八行}」「自然居士にゐのまへ道行 正本^{九行}」「嬬^{こもろ}

山姥頼光道行 正本^{三行}」「かぐら高砂 都太夫一中正本^{八行}」「ゆうし桜づくしなら土産名所記^{一都太夫 八行}」「嬬^{こもろ}

「傾城絵姿三幅対^{けいぎあすがた ぶくづ} 都太夫一中正本^{三行}」「美人ぞろゑ^{一十行}」「用明天皇 船路の道行^{三行}」「大君花てる姫道行^{一都太夫 八行}

正本^{八行}」「かまくら八景^{三行}」「角田川月見の船 都太夫一中直伝^{十行}」「もんさく末社名よせ^{十行}」「石垣^{一都太夫 八行}

新船茶屋名寄^{十行}」「有馬みやげ ゆな紋づくし^{十行}」「越路の湊^{こしち 女郎名よせ} 千ト北国みやげ^{十行}」「祇園のう^{うき世まんざい}

れん茶屋名よせ 太夫正本^{三行}」「しのゝめ道行 ふし付^{ハ・九行}」「石垣風流茶屋名よせ 都太夫一中正本^{十行}」「

「都ふろ屋の名よせ 都太夫一中正本^{十行}」「都のいぬる色すだれ^{八行}」「大和歌五こく色紙 小町少将道行^{九行}」「

「平安城^{てんわう 道行 十行}」「はらみわかな^{十行}」「あかねや半七^{かさや三かつ} 心中下段^{十行}」「好色遊山八景 正本^{九行}」「島つ^{わかほのまへ}

くし 都太夫一中正本^{十行}」「進上物ぞろへ^{十行}」「勇士の三つ物^{うすぎ 道行} 都太夫一中正本^{十行}」「八百屋お七^{うすぎ}

みちゆき 都太夫一中正本^{十行}」「風流まちづくし 白むく^{九行}」「松つくし 都太夫一中正本^{十行}」「けいせい^{一都太夫 八行}

しのぶ草 都太夫一中正本^{九・十行}「五段曾我虎うき名川 都太夫一中直正本^{三行}」^{（注¹）}「鑑曾我形見おくり 都太夫一中正本^{十行}」^{（注²）}「五段曾我げんぶくしゆすびん^{七行}」^{（注³）}「助六道行 太夫ふし付^{九行}」^{（注⁴）}「枕づくし 都太夫一中正本^{八行}」^{（注⁵）}「助六あげ巻二度心中道行^{八行}」^{（注⁶）}「わん久道行 都太夫一中正本^{三行}」^{（注⁷）}「半七三かつ心中道行^{八行}」^{（注⁸）}「姫が滝四季の山めぐり 都太夫一中直正本^{十行}」^{（注⁹）}「姫が滝水の上風流 都太夫一中直正本^{十行}」^{（注¹⁰）}「秘密^{ひみつ}のごま とぎわぎの道行^{九行}」^{（注¹¹）}

本書の刊年は不明であるが、忍頂寺氏は、正徳末或は享保初年のものと推定され、「都羽二重拍子扇」よりは早いものとされている。^{（注¹）}氏は、本書を「正徳四年一中節段物集（仮題）」より後と考えられたために右の推定となったようであるが、正徳五年以降成立の一中節段物集に必ず収載されている一中の当り曲「おなつ清十郎笠物狂道行」が本書にみられないことから考えて、正徳五年以前の成立、しかも、正徳二年上演の「姫山姥」や、正徳四年の正月に歌舞伎で上演された「大和歌五穀色紙」を当て込んだ曲が収載されていることから考えて、正徳三、四年中の刊行で、「正徳四年一中節段物集（仮題）」に先立つ作であつたろう。

「大和歌五穀色紙」は宇治薩摩の正本や、同内容の豊竹若太夫正本「小野小町都年玉」などが存在し、元来は操り浄瑠璃で演じられたものであつた。その刊行年は、正徳二、三、四年の間と祐田善雄氏や信多純一氏らによって推定されている。この両氏の考証の拠り所は文中の貨幣相場から出ているものであるが、他に、この両氏の推定を裏付ける資料が、正徳四年の初興行に京の早雲座で上演された同外題「大和歌五穀色紙」という歌舞伎である。この作品については後にもふれるが、東京芸術大学所蔵の絵入狂言本は、外題簽の役者の顔触れと、正徳四年正月刊行の役者評判記『役者目利講』の予告を掲載することにより、正徳四年の初狂言に上演されたものと推定され、文中所々に節草

を施した箇所も認められ、まさに浄瑠璃本を利用した作であった。この作が、正徳四年の初狂言とすれば、浄瑠璃は正徳三年中、「千朴秘曲集」は、正徳三年遅くか、正徳四年早くの刊行となろう。尚、『鸚鵡籠中記』によれば、正徳四年の五月七日にも名古屋大須の願正寺で難波太夫が「小野小町都年玉」を上演している。大阪大学所蔵。

注1 『書物展覧』（第百四十二号、昭和十八年一月）所収「一中節の古板本に就て」

注2 『国語国文』巻六の七・八所収「紀海音の著作年代考証とその作品傾向」

注3 『加賀掾段物集』所収「宇治加賀掾年譜」

都千ト拍子扇

半紙本一冊。原表紙。題簽欠。表紙見返し、右端に「都千ト拍子扇目録こよみはまいねん 替り申故入不申候」とあり、上下二段に別けて全四十章の目録を記している。本文七十二丁。奥付半丁。奥付に「右此本者依為懇望文句音節／等悉校合加秘密令開板者也／都太夫一中／四条通御旅町南側／笹屋／清右衛門板板」とある。本文収載の曲名は次の通り。

「有馬みやげ」ゆな紋づくし三行「おなつかさ物ぐるひ道行三行」「しのゝめ道行三行」「平安城てんわう」道行わかのまへ

八行「傾城絵姿三幅対けいせいゑすがた ぞくつい」都太夫一中正本三行「かぐら高砂三行」「わん久道行六行」「助六上巻二度心中道行三行」

「進上物ぞろへ一丁半」「下巻 かさや三かつ一丁半」「半七三かつ心中道行三行」「石垣茶屋名よせ一丁」「勇士ゆうしの

三ツ物道行三行」「ゆうし桜づくしなら土座名所記三行」「美人びじんぞろへ三行」「大君花てる姫道行三行」「かまくら

八景三行」「姫山姥こもやまぢば 頼光道行三行」「秘密ひみつのごま ときわぎの道行三行」「枕づくし三行」「越路の湊女郎名よせ うき世まんざい

千ト北国みやげ二丁」「富貴ふっき曾我 助時宮めぐり九行」「富貴ふっき曾我 さつき御前道行三行」「用明天王ようめいてんわう 舟

路の道行三行」「自然居士じねんこじ 二位の前道行三行」「助六道行三行」「姫が滝四季の山めぐり十行」「姫が滝水の上風

流^{十行}「けいせいしのぶ草^{九・十行}」「大和歌五こく色紙 小町少将道行^{九行}」「松づくし^{十行}」「祇園のうれん茶
屋名よせ^{十行}」「風流まちづくし 白むく^{九行}」「五段曾我虎^{とら}うき名川^{十行}」「鎧曾我形見おくり^{十行}」「五段曾
我げんぶくしゆすびん^{七行}」「島づくし^{三行}」「好色遊山八景 菅野宇太夫作^{九行}」「八百屋お七みちゆき^{十一行}」

以上の三十九章である。尚、目録に記す曲名は次のようである。

壹 ありまみやげゆなもんづくし

貳 おなつ清十郎かさ物くるい道行^{マヤ}

三 子の日の松しのゝめ道行

四 平安城わかほのまへ道行

五 色はたけはらみわかな

六 かくら高砂しのぶ姫道行

七 わん久きやうらんの道行

八 同下のまき十徳六方

九 三ふく対まさかた道行

十 助六後日心中道行

十一 同進上ものそろへ

十二 かさや三かつ下之巻

十三 同半七三かつ心中道行

- 十四 石かけ風流茶や名よせ
十五 ゆうしのみつもの姫君道行
十六 同なら八景さくらつくし
十七 天智天王ひしんそろへ
十八 同大君花てるひめ道行
十九 手枕曾我かまくら八けい
廿 ひみつのごまときはぎ道行」以上上段
廿一 子もち山うば頼光道行
廿二 和泉式部枕つくし
廿三 用明天王舟路の道行
廿四 福貴曾我祐時みやめぐり
廿五 同さつきごぜん道行
廿六 自然居士二位のまへ道行
廿七 けいせいしのふくさ
廿八 はちたゝき小町少将道行
廿九 ほうらい松つくし
卅 助六心中道行

卅一 姫が滝四季山めぐり

卅二 同水の上ふうりう

卅三 しきつのうら町つくし

卅四 きをんのうれん茶や名よせ

卅五 五段そがうきな川

卅六 同兄弟かたみおくり

卅七 千卜北国みやげ

卅八 朱雀の心中島つくし

卅九 好色ゆさん八景

四十 八百屋お七道行」以上下段

この目録と本文を比較するとかなりなずれがある。目録五の「色はたけはらみわかな」は本文に存在しない。その逆に本文にある「五段曾我んぶくしゆすびん」は目録に載っていない。又、目録八の「同下のまき十徳六方」は、本文では、前の「わん久道行」からすぐにつづけられて、独立した曲名は記されていない。次に、目録と本文の順序が大きく喰い違っており、まず本文の五番目、目録では「五色はたけはらみわかな」とあるところに、目録九番目にあたる「傾城絵姿三幅対」が入っている。以下、十九番目まで目録通りに配列されているが、その後、本文の位置は大きくずれ、目録番号で、21、20、22、37、34、24、25、23、26、30、31、32、27、28、29、34、33、35、36（この後本文では、目録に存在しない「五段曾我んぶくしゆすびん」が入る）、38、39、40の順序で並んでいる。

本書の刊本年について、忍頂寺氏は、前の「千朴秘曲集」と対比して、板式などの相違するところから、幾分遅れた出版かと推定され、その刊年は不明とされつつも、次にのべる「都羽二重懷中扇」の前に位置させられておられる。本書の内容を「千朴秘曲集」と比較すると、「秘曲集」にあって本書にないものは、「角田川月見の船」「もんさく末社名よせ」「石垣新船茶屋名寄」「都ふる屋の名よせ」「都のいぬる色すだれ」「はらみわかな」の六曲となり、逆に、本書にあって、「秘曲集」に存在しないものは、「おなつかさ物ぐるひ道行」「同（わん久）下のまき十徳六方」の二曲となる。この新しく収録された二曲が本書の刊行年推定の重要な手掛りとなる。

「おなつかさ物ぐるひ道行」は、正徳五年の十一月、市村座の顔見世に江戸へ下った一中が語って大当りをとった曲で、正徳四年の暦浄瑠璃を持つ「正徳四年一中節段物集（仮題）」にはじめて収録され、以後の一中節の段物集に必ず収められる代表曲となった。従って、この曲を収める本書は正徳五年以降、幅をみても正徳四年以降の成立となる。

次に、「同（わん久）下のまき十徳六万」を見よう。この曲の本文は一中節丸本の「椀久末の松山」の下巻、道行の終ったあとの部分をそっくり用いているが、注目されるのは、椀久のせりふの部分に新しく「いろ大和山詞」とある節章指定が認められることである。これは、歌舞伎役者大和山甚左衛門が、椀久に扮した舞台を当て込んだものである。その点で参考になるのは、享保二年正月刊行の役者評判記『役者色茶湯』である。同書京巻の立役大和山甚左衛門の条に

盆に班女が扇にも狂乱、又十月髪なし月わん久にも、氣ちがい殊に桃色の十徳、若々しいだてもやうの小袖ハ色取風、古甚のわん久ハ黒十徳紙子ア、面白い事で有た

とあって、十徳を着ての椀久の演技が評判であったことが知れて、一中節曲名の「十徳六方」とあるに符合する。本書は、享保元年十月以降、恐らくは享保二年中の出版かと推定する。大阪大学所蔵。

都羽二重懷中扇

横小本一冊。替表紙。替題簽「都羽懷中扇」。序文二丁。目錄二丁。本文六十一丁。奥付半丁。表紙見返しに忍頂寺氏の筆跡による書入れ「横本一冊、丁数六十四丁、序一、目錄二／奥付半丁、×印七曲は『都羽二重拍子扇』に／収載なし」。序文「懷中扇の序／鶯の子に三光をつくれは其音／を聞得て囀ること此直伝のふし／つけに心をこめてかたり給ハゞ太夫／の一曲にひとしく聞人感を／催して一座の興となりぬへし／たとへ声よからん人もふし／悪ては三光を囀り得ぬ野鳥／のごとくならんさるによつて此度新に／太夫の秘節を加へ此流義を／学ん人所望に應してやす／らかに語らるゝお嗜の懷中扇子の／要なる節所の数々を集て／板行せしむるものなり」。目錄は「都羽二重懷中扇目錄」と題して次の通り。

「松のうち御嘉儀」「源氏十二段 長生殿庭の四季」「蓬萊子日松 まつづくし」「和泉式部 まくらづくし」「怨霊曾我 ふねづくし」「勇士三ッ物 さくらづくし」「風流町尽 白むく烏つくし」「椀久末の松山 きやうらんのだ行」「おなつ清重郎 かさもののぐるひ」「あかね半七笠屋三かつ 心中下之段」「同 半七三かつ道行」「吾妻歌七枚起請 八百屋お七みち行」「万屋助六心中 あげまき道行」「神樂高砂 しのぶ姫みち行」「八千代の玉垣 なをしの前みち行」「天智天皇 びじんぞろへ」「同 大君花てる姫道行」「用明天王職人鑑 ふなちのみち行」「平安城 天王ささき道行」「蓬萊子日松 しのゝめみちゆき」「念仏往生記 きよひめ道行」「自然居士 二位のまへ道行」「姫山姥 らいくはう道行」「勇士三ッ物 姫君うす雲道行」「富貴曾我 さつき御ぜん道

町目／谷村清兵衛板／京六角通新町西へ入町／吉野屋源兵衛（以下不明）」とある。

例によって、本文と目録の間に順序のずれがある。目録の順序に従って、本文の配列を示すと、1、2、3、5、7、4、6、8、9、13、10、11、12、14、15、16、17、18、19、21、22、23、24、25、26、27、28、29、20、30、31、32、33となる。本文と目録との間に曲数上の増減はない。

本書の刊年について、忍頂寺氏は、享保三年頃の刊行と推定しておられるが、その根拠は挙げてない。本書は一中の現存段物集中、最初の横本形式をとったもので、行数も十一行に統一するなど、相当意欲的な編集を行っている。従前の段物集に見えず、この書にはじめて収載された曲も八曲の多きを数える。次の曲である。

松のうち 御嘉儀

源氏十二段 長生殿 庭の四季

怨霊曾我 舟尽

吾妻歌七枚起請 八百屋お七道行

八千代の玉垣 なをしの前道行

念仏往生記 清姫道行

釈迦八相記 しゃのくどうじ道行

誓願寺本地 けしこく道行

これらのうちで、「都羽二重懷中扇」の刊年推定の手掛りを与えてくれるものは、「松のうち」「吾妻歌七枚起請」「八千代の玉垣」の三曲である。

「松のうち」は、河東節の「松の内」と同詞章で、河東節を流用したものと知れるが、河東節「松の内」は『野傾髪透油江戸巻』や『歌舞伎図説』第七十九図に収める正本表紙などにより、享保二年二月十七日より江戸市村座の「傾城富士高根」で上演されたことは確かである。その詞章を借用した一中節「松のうち」を収める「懷中扇」は享保二年二月以降の成立となろう。

次に「吾妻歌七枚起請」をみよう。富松薩摩の正本に「吾妻歌七枚起請」という上中下三卷本のあることは、早く、若月保治氏が紹介^{注2}しておられる。その下之巻にあたるところに「お七道行 一中正本」とある。この「吾妻歌七枚起請」は伊原青々園の所蔵であったというが、現在は、早大演劇博物館の所蔵に帰している。他に、天理大学図書館にも一本が所蔵されている。この「お七道行 一中正本」の部分を「懷中扇」収載曲と比較するに全く同一文で、「懷中扇」収載曲が、お七の鈴か森に着く所で終わっているのに対し、薩摩の正本では、その場へ吉祥寺の和尚が落髪した吉三郎もろともに駆けつけ、いのち乞いする筋がそのあとに加わっているのみである。従って、この富松薩摩正本の成立が、「懷中扇」の成立年を解く一つの手掛りとなる。富松薩摩が宇治薩摩から改名したのは、「京四条芝居間敷並名代之事」により、正徳五年十二月とされるから、「吾妻歌七枚起請」の成立はそれ以降でなければならぬだろう。

「八千代の玉垣」、正式には「山王権現八千代玉垣」といい、東大教養部その他に富松薩摩正本が所蔵されている。「なをしの前道行」は、その中巻にあって、一中節の文句と一致する。この「山王権現八千代玉垣」の刊年について、若月保治氏は、近松の「国性爺合戦」中の、鶯と蛤の戦いの趣向をまねた部分があり、又、「国性爺合戦」を役者の榊山小四郎が上演したとか、「村山平十郎が口まねをうつすよふうつすうつしもうつす阿波太夫節……」など

の文句が曲中にあるところから、享保元年秋京の万太夫座で榊山小四郎らが「国性爺」を上演した後とされ、下限については、享保四年八月刊の「八百屋お七江戸紫」が「山王権現八千代玉垣」の上巻及び中巻の一部を殆どそのままとり入れているところから、享保四年夏頃迄のものと推定^{注3}しておられる。この推定は従うべきものである。

以上を総合すると、「都羽二重懷中扇」の刊年は、河東節「松の内」の成立した享保二年二月以降、「山王権現八千代玉垣」の成立で判断しても享保元年秋以降ということになり、忍頂寺氏の享保三年頃という推定はほぼ妥当なものとなる。大阪大学所蔵。

注1 前述「一中節の古板本に就て」

注2・注3 『古浄瑠璃の研究第三卷』

音曲都の鶴

横小本一冊。替表紙。題簽欠。表紙見返し書入れ「丁数四十八丁半 二十二章」。目録一丁。本文四十七丁半。各丁十二行。刊記「大坂／あまが崎町／よとや橋筋角／正本屋／山本弥兵衛板」。目録は「音曲都の鶴／目録一中正本」と記して次の通り。

「山崎与次兵衛あづま道行」「都ノ辰巳四季の景」「八千代の玉垣なをしの前道行」「七枚起請お七道行」「けいせい三度笠相合籠道行」「助六心中道行」「姫が滝四季の山めぐり」「しき津のうら町づくし」「祇園のふれん茶や名よせ」「石かけ風流茶屋名よせ」「好色遊山八景」「八百屋お七道行」「神楽高砂しのぶ姫道行」「わんきう狂乱の道行」「大経師柱磨^{だいきんしちうま} 戌兵へ道行」「おなつ清十郎笠物狂ひ」「子の日の松しのめ道行」「有馬みやげ湯女紋づくし」「色島はらみわかな」「朱雀心中島づくし」「あばしいろあんど」「三幅対まさかた道行」

本文の内容は次のようである。

「寿の門松わびき かどまつ 山崎与次兵へ道行都半仲約二」 「都の辰巳四季景なみしきけい 中都約二」 「八千代の玉垣やちよ たまがき なをしのまへ道行約二」 「七

枚起請お七 道行約二」 「正中本約二」 「三度笠相合籠あいやいかご 道行都半仲約二」 「助六道行約二」 「姫が滝四季ひめがたき の山めぐり約一」 「しき津

のうら町づくし約一」 「祇園ぎん のうれん茶屋な 名よせ約三」 「石垣風流茶屋せ 名よ約二」 「好色遊山八景かうしよくさん ばっけい 丁半約三」 「八百屋お

七道行約一」 「かぐら高砂しのぶ 道行約二」 「わん久狂乱きやうらん の道行約二」 「大きやうじ柱曆はしらこゝろ 道行約二」 「おなつ笠物おなつ かつ

狂くる 道行約二」 「子の日の松しのゝめ 道行約二」 「有馬ありま みやげゆな 紋な づくし約二」 「色畠いろはたけ はらみわかな約一」 「朱雀心中しゅしか 中島づ

くし約一」 「あばし色あんどふし 丁半約一」 「傾あすなさん 絵姿三幅対まさかた 道行約二

目録と本文の順序との間にずれはない。本書の刊年について、忍頂寺氏は、根拠をあげずに「都羽二重拍子扇」より

後かと推定されている。「都羽二重拍子扇」については、忍頂寺氏は、享保末年以降と推定されているので、本書は

元文寛保の頃の刊行とされるわけである。

これ以前の「都羽二重懷中扇」までの段物集に見えず、この集に収載されている曲は次の五曲である。

寿の門松山崎与次兵へ 道行都半仲中都

都の辰巳四季景一中

三度笠相合籠道行 都半仲

大きやうじ柱曆おさん 道行茂兵へ

あばし色あんど一中

このうち、「寿の門松」は享保三年刊の近松の同名曲の下巻「与次兵衛吾妻道行」、「三度笠相合籠道行」は、詞章は正徳元年の近松の「冥途の飛脚」の下之巻「忠兵衛相合駕籠」の詞章を適宜省略して用い、題名のみ、正徳三年刊の海音作「傾城三度笠」から借りている。又、「大きやうじ柱曆」は、正徳五年刊の近松の「おさん茂兵衛大経師昔曆」の下之巻「おさん茂兵衛こよみ歌」の詞章を土台に適宜省略、転置して成っている。ただ、この曲の「柱曆」という題名は、歌舞伎では早く享保二年の七月に大坂の岩井半四郎座で「柱曆昔雛形」という名題で大経師狂言が上演されているが、浄瑠璃では、元文五年まで下って、大坂竹本座で「恋八卦柱曆」と題して、「大経師昔曆」の外題替えが上演されているのが早い例である。以後、この外題でしばしば上演を繰返すことになる。もし、一中節が、この曲名を借用したとすれば、この集の成立は元文五年以降ということになる。

次に問題となるのは、集中に弟子の都半仲の作が見えることである。都半仲即ち後の初世宮古路豊後掾が、師である一中の許を去って、宮古路と改姓した時期は不明であるが、享保七年十二月大坂の嵐座で上演された「山崎与次兵衛半中節」に宮古路国太夫半中と名告って出語りをしていたことが『役者氣振舞』に記されているので、この頃までに師から独立していたことは明らかである。本書に収載の半仲の作品は、大体享保七年までには成立していたことになる。しかし、この事実から、直ちに本書の成立を享保七年以前と決定できないところに、再版、板木流用といった複雑な出版事情のひそむこの種の書物の刊年決定の困難さがある。

「音曲都の鶴」に収められる二十二曲は全て旧刻の「都羽二重拍子扇」に収録されているので、この「都羽二重拍子扇」との関係を見のがすわけにはいかない。「都の鶴」の刊年の問題は暫くおき、「都羽二重拍子扇」について考えよう。なお、「音曲都の鶴」は大阪大学所蔵。

注 前述「一中節の古板本に就て」

都羽二重拍子扇（旧刻）

半紙本上下二冊。本書の原本未見なので、東京芸術大学所蔵の影写本によって記す。題簽「都羽二重拍子扇 上（下）」。「目録一丁。本文、上四十六丁、下四十丁。刊記半丁。刊記「右此本者依為懇望文句音節／等悉校合加秘密令開版者也／都太夫一中／京／四条通寺町／西へ入町北側／正本屋／谷村清兵衛板」。目録は「都羽二重拍子扇 五番目録」として次の通り。

「都辰巳四季のけい」「八千代の玉垣なおしの前道行」「七枚きしやうお七道行」「出世の鉢木西明寺道行」「山崎与次兵衛あつま道行」「けいせい三度笠相合かご道行」「酒吞どうじ頼光四天王道行」「大経師柱曆茂兵衛 おさんみち行」「丹波与作ゆめちのこま」おなつ 清十郎かさ物ぐるひ道行」「子の日松しのゝめみちゆき」「有馬みやげゆな紋づくし」（以上一オ上段）「同大君花てるひめ道行」「子もち山うば頼光道行」「手枕そががまくら八けい」「ひみつのごまときはぎ道行」「いづみ式部枕づくし道行」「用明天皇ふなちの道行」「ふつきそがすけ時宮めぐり」「同さつき御ぜんみちゆき」「じねんこじ二ゐの前道行」「けいせいしのぶぐさ」「あぼし色あんどろ」「鉢たゝき小町少将道行」「ほうらい松づくし」（以上一ウ上段）「平安城わかばの前道行」「色ばたけはらみわかな」「かくら高砂しのぶ姫道行」「わん久きやうらんの道行」「三ふくついまさかた道行」「助六後日心中みちゆき」「同しん上物そろへ」「かさや三かつ下之巻」「同半七三かつ心中道行」「ゆうしの三物ひめ君道行」「同なら八けいさくらづくし」「天ち天皇びじんぞろへ」（以上一オ下段）「助六心中みちゆき」「ひめがたき四季山めぐり」「同水の上ふうりう」「しき津のうら町づくし」「ぎをんのうれん茶屋名よせ」「石かけふうりう茶や名よせ」「五段

そがうき名川」「同兄弟かたみをくり」「同げんぶくしゆすびん」「しゆしやか心中島づくし」「千ト北国みやげ」「好色ゆきさんはつけい」「八百屋お七みちゆき」(以上一ウ下段)

本文の内容は次のようになっている。

「都の辰巳四季景 一中正本^{七行}」「なおいのまへ道行^{七行}」「お七道行 一中正本^{八行}」「出世の鉢木最明寺道行^{八行}」「寿の門松^{わびぎ} 山崎与次兵衛^{山崎あつま} 道行 都半仲^{八行}」「三度笠相合籠道行^{さんど笠あひあひ} 都半仲^{八行}」「酒吞童子^{しゅたんどうじ} 頼光^{頼光} 都半仲^{八行}」「大きやうじ柱曆^{はしらこよみ} 茂兵衛^{おさん} 道行^{三行}」「身作^{みやく} 夢路^{ゆみち}の駒 都半仲^{八行}」「おなつかさ物ぐるひ道行^{三行}」「しのゝめ道行^{三行}」「有馬みやげゆな紋づくし^{八行}」「大君花てる姫道行^{八行}」「姫山姥^{こもやまうば} 頼光道行^{八行}」「かまくら八景^{八行}」「秘密^{ひみつ}のごま ときわぎの道行^{九・八行}」「枕づくし^{八行}」「用明天王 舟路の道行^{九行}」「福貴曾我^{ふつきまが} 助時宮めぐり^{九・八行}」「富貴曾我^{ふつきまが} さつき御前道行^{九・八行}」「自然居士^{じぜんこじ} 二位の前道行^{九・八行}」「けいせいしのぶ草^{十・九行}」「あばし色あんど 一中ぶし^{十行}」「大和歌五こく色紙 小町少将道行^{九行}」「松づくし^{十行}」(以上上巻)「平安城^{てんわう} 道行^{八・七行}」「はらみわかな^{八行}」「かぐら高砂^{八行}」「わん久道行^{八行}」「傾城^{けいせい}絵姿^{えすがた}三幅対^{さんぷたい} まさかた道行^{八行}」「助六上巻二度心中道行^{八行}」「進上物ぞろへ^{八行}」「下巻^{八行}」「半七三かつ心中道行^{八行}」「ゆうし桜づくしなら土産名所記^{八行}」「勇士の三ッ物^{みめ} 道行^{十行}」「美人^{びじん}ぞろへ^{八行}」「助六道行^{九行}」「姫が滝四季の山めぐり^{十行}」「姫が滝水の上風流^{十行}」「風流まちづくし白むく^{九行}」「祇園のうれん茶屋名よせ^{十行}」「石垣茶屋名よせ^{八行}」「五段曾我虎うき名川^{十行}」「鎧曾我形見おくり^{十行}」「五段曾我げんぶくしゆすびん^{七行}」「島づくし^{十行}」「越後の湊^{うき世まんざい} 千ト北国みやげ^{八・七行}」「好色遊山八景 菅野宇太夫作^{三行}」「八百屋お七みちゆき^{十行}」

十一行 (以上下巻)

この集の刊年について、早く高野辰之氏は元文寛保の頃と推定^{注1}されておられるが、特にその拠り所を示しておられるわけではない。忍頂寺氏も又、都半仲の作品が加わっているところから、享保末年よりさかのぼるものでないと推^{注2}定しておられ、ほゞ、高野説に同調しておられる。

これ以前の段物集(「音曲都の鶴」は除く)に見えず、本書に収載されている語物は次の八曲である。

都の辰巳四季景

出世の鉢木最明寺道行

寿の門松 山崎与次兵衛
藤屋あつま 道行 (都半仲)

三度笠相合籠道行 (都半仲)

酒吞童子 頼光
四天王 (都半仲)

大きやうじ柱曆 おさん
茂兵衛 道行

与作
おさん 夢路の駒 (都半仲)

あぼし色あんど

四曲に及ぶ都半仲の語物がこの集に見られ、しかも、この集以前の段物集には見られないということは、この集の成立年を決定する重要な決め手といってよからう。他の四曲中、「出世の鉢木最明寺道行」は正徳五年十一月の江戸の市村座の顔見世に一中が語った曲であり、又、「大きやうじ柱曆 おさん
茂兵衛 道行」が正徳五年の春に大坂の竹本座で上演された「大経師昔曆」から詞章を流用したものであることについては前に述べた。「都の辰巳四季景」と「あぼし

色あんど」の製作年代の不明なことが若干気にかかるが、「都の辰巳四季景」は、享保四、五年頃までには成立していたとみるべき可能性が強い。都太夫一中の跋文を備え、かなり形式の整った段物集であることも併せ考え、旧刻の「都羽二重拍子扇」は、都半仲が師の許を去って独立する以前、遅くとも享保七年までには成立していたものと見てよいのではなからうか。書肆の谷村清兵衛は「都羽二重懷中扇」の出版にも名を連ねており、初代一中と関係の深い出版書肆であり、又、『^{慶長以来}書賈集覧』によれば、正徳から享保までの間に活動をつづけた書肆であったことも右の推定を助けるであろう。

さて、以上のように「都羽二重拍子扇」を初代一中生存中の最晩年の刊行と推定した場合、課題として残した「音曲都の鶴」との前後はどうなるであろうか。「都の鶴」収載の二十二曲は全て「拍子扇」に収録されている曲である。恐らくは「都羽二重拍子扇」から一中節の代表曲を選択して編纂し直した段物集で、その成立は「都羽二重拍子扇」に遅れるものであろう。「都羽二重拍子扇」で、巻頭に据えられて祝言曲としての取扱いを受けていた「都の辰巳四季景」の前に、弟子筋の都半仲の「寿の門松」を据えていることは、この「都の鶴」が一中没後の段物集で、一中の息のかかっていない集であるか、又は、弟子の半仲が師の一中に代って抬頭を示した時期の段物集であるように思わせること、出版元が初代一中の段物集としては異例の大坂の書肆であることなどがそのように推定させるのである。

注1 『徳川文芸類聚第九』解説、『日本歌謡集成巻十』解説、他。

注2 前掲「一中節の古板本に就て」

異本都羽二重拍子扇

これまでに知られている谷村清兵衛版の旧刻「都羽二重拍子扇」とは内容に相違のある異本「都羽二重拍子扇」が

岩瀬文庫に所蔵されているので、次にそれについて述べよう。

半紙本一冊。題簽「都羽二重拍子（以下破れ）」。目録一丁。本文八十一丁。刊記半丁。但し、この刊記は、先に紹介した正徳三、四年頃刊行の「千朴秘曲集」の奥付をそっくり流用したもので、造本の際のミスとみられるが、出版書肆は同一の京の吉野屋源兵衛であろう。目録は「都羽二重拍子扇五十番目録 一中正本」として次の通り。

「都の辰巳四季のけい」「江戸八けい名所づくし」「大きやうじ死出の道行」「ふつきそがすけ時宮めぐり」「同さつき御前道行」「かくら高砂しのぶ姫道行」「ゆうし三ツ物姫君道行」「天智てんわう美人ぞろゑ」「同大君花てる姫道行」「用明天わう舟路の道行」「石垣色すだれ新名よせ」「越路ミなど女郎名よせ浮世まんざい」（以上一オ上段）「八千代玉垣なをしのまへ道行」「あづま歌七枚きしやうお七道行」「清十郎おなつかさ物ぐるひ道行」「じねんこじ二ゐの前道行」「こもち山姥らくわう道行」「なら八けいさくらづくし」「三幅対政方はちたゝき道行」「手枕曾我かまくら八けい」「千ト江戸ミやげ月見の船」「傾白末社名よせ」「有馬ミやげゆな紋づくし」「あかね半七笠や三かつ心中道行」（以上一オ下段）「大和歌五こくしきし小町少将道行」「色ばたけはらミわかな」「和泉しきぶ歌枕づくし」「八百お七枕びやうぶ道行」「しゆしやか心中島づくし道行」「吉日よろひ曾我とらうきな川」「助六心中道行」「同後日おかた成道行」「同進上物ぞろひ」「都遊子風呂名よせ」「しのゝめ道行」「ほうらい山まつづくし」「てつとう仙人四季山めぐり」（以上一ウ上段）「平安城わかばの前道行」「わん久きやうらの道行」「ひみつのごまときわ木の道行」「好色遊山八けい」「笠や三かつ下のだん」「五たん曾我兄弟かたミ送り」「げんぶくそがしゆすびん」「ぎをんのうれん茶や名よせ」「石かきふうりう」「北野あんどう平野八けい」「しきつの浦大ミなど風流町づくし」「けいせいしのぶ草」「姫滝水の上風流」（以上一ウ下段）

本文の内容は次のようになっている。

「都の辰巳四季の景 一中正本^{七行}」 「なをしのまへ道行^{七行}」 「江戸ミやげ名所つくし 都太夫一中正本^{八行}」
「お七道行 一中正本^{八行}」 「大きやうじ柱曆^{はしらどよみ} 道行^{八行}」 「おなつかさ物ぐるひ道行^{八行}」 「福貴曾我 助時^{つくとけ} 宮めぐり^{九・八行}」 「富貴曾我五月御前道行^{ふつき ときみ} 正本^{三行}」 「自然居士にのまへ道行 正本^{九行}」 「堀山姥頼光道行^{こちやまうば} 正本^{三行}」 「かぐら高砂 都太夫一中正本^{八行}」 「ゆうし桜つくしなら土産名所記^{みやげ} 都太夫^{都太夫} 一中正本^{八行}」 「傾城絵姿三^{けいせい えすがた} 幅対^{はくたい} 都太夫一中正本^{八行}」 「美人ぞろゑ^{びじん} 一十行」 「用明天皇^{ようめいてんわう} 舟路の道行^{ふろ} 一十行」 「大君花てる姫道行 正本^{八行}」 「かまくら八景^{はちけい} 一十行」 「角田川月見の船 江戸ミやげ 都太夫一中直伝^{ちうでん} 一十半」 「もんざく末社名よせ^{しん} 一十半」 「石垣新船^{いしがき} 茶屋名寄^{ちやう} 一十行」 「有馬ミやげ ゆな紋づくし^{こしち} 一十半」 「越路の湊^{みなと} 女郎名よせ^{むすめな} 千卜北国ミやげ^{せんくつ きたくに} 一十半」 「祇園のうれん^{ぎえん} 茶屋名よせ 太夫正本^{ちやう} 一十行」 「しのゝめ道行 ふし付^{うしづけ} 一十半」 「石垣風流茶屋名よせ 都太夫一中正本^{しん} 一十半」 「都^{みやぎ} ふう屋の名よせ 都太夫一中正本^{ちやう} 一十半」 「北野あんどう茶屋名よせ 都太夫一中正本^{しん} 一十半」 「大和歌五こく色紙^{おほやまと} 小町少将道行^{こまち しょうしょう} 一十行」 「平安城^{へいあんじやう} 道行^{ちやう} 一十行」 「はらみわかな^{はらみわかな} 一十行」 「あかねや半七^{あかねや はんしち} 心中下段^{しんちゆう げだん} 一十行」 「好色遊山八^{こうしやく いうざん} 景 正本^{きやう} 一十行」 「島づくし 都太夫一中正本^{しん} 一十行」 「進上物ぞろへ^{しんじやう ぶつ} 一十行」 「勇士の三ツ物^{ゆうし} うみね 道行 都太夫一中正^{ゆうし} 本^{しん} 一十行」 「八百屋お七みちゆき 都太夫一中正本^{しん} 一十行」 「風流まぢづくし白むく^{ふうりゆう まぢづくし しろむく} 一十行」 「松づくし 都太夫一中正^{しょう} 本^{しん} 一十行」 「けいせいしのぶ草 都太夫一中正本^{しん} 一十行」 「五段曾我虎うき名川^{ごだん ぞうが くと うき ながは} 都太夫一中直正本^{ちやう ほん} 一十行」 「鍬曾我^{くわ ぞうが} 形見^{かたみ} おくり 都太夫一中正本^{しん} 一十半」 「五段曾我けんぶくしゆすびん^{ごだん ぞうが けんぶくし ゆすびん} 一十行」 「枕づくし 都太夫一中正本^{まくら} 一十半」 「わん久道行 都太夫一中正本^{わんきう} 一十行」 「助六道行^{すけ りくだう} 一十行」 「助六あげ巻二度心中道行^{すけ りく へく けり ぶくし じやうちゆう} 一十行」 「半七三かつ心中道行^{はんしち さんかつ じやうちゆう} 一十行」

「秘密ひみつのごま　ときわぎの道行みちゆき」 「姫が滝四季の山めぐり　都太夫一中直正本十行」 「姫が滝水の上風流　都

太夫一中直正本十行

目録と本文の間には順序のかなりなずれがあるが、内容上の増減はない。これを、二冊本の「都羽二重拍子扇」と比較するに、本書にあって、二冊本の方にない曲は

江戸八けい名所づくし

石垣色すだれ新名よせ

千ト江戸ミやげ月見の船

傾白末社名よせ

都遊子風呂名よせ

北野あんどろ平野八けい

の六曲であって、逆に二冊本にあって本書にない曲は、

出世の鉢木西明寺道行

山崎与次兵衛あつま道行

けいせい三度笠相合かご道行

酒吞どうじ頼光四天王道行

丹羽与作ゆめちのごま

あぼし色あんどろ

の六曲となる。又、現在する他の段物集にはみえず、この異本「都羽二重拍子扇」にのみ収載されている曲に「江戸八けい名所づくし」がある。

さて、本書の成立問題推定に重要な手掛りを与えてくれるのは、「千朴秘曲集」との関係である。本書の奥付に「千朴秘曲集」の奥付の流用されていたことは前に述べたが、内容上でも両者は密接な関係にあり、「千朴秘曲集」の四十四章中、本書に載せられていないのは、「都のいぬる色すだれ」の一章のみである。本章は、「千朴秘曲集」をもとにして、それを増補する形で成立したものであろう。さらに、本書には、これまで、他の段物集の刊年推定に利用した「八千代玉垣なをしのまへ道行」や「あづま歌七枚きしやうお七道行」が収録されている。これらの曲の存在によって、本書の成立は享保にはいつてからでなければならない。又、二冊本の「都羽二重拍子扇」に収録されている弟子の都半仲関係の曲が一曲も本書に収められていないことは、初代一中門下において、半仲がまだ抬頭を示していない時期の成立であることを思わせ、「江戸八けい名所づくし」などの存在から考え、二冊本の成立に先立つ、享保四、五年頃、つまり、一中最後の江戸下りを終えて、上京後間もなくの刊行であったのではあるまいか。

本書が出現してみると、所謂旧刻の「都羽二重拍子扇」は、本書をもとにして、改訂を加え、弟子の都半仲の作を大量に収載して成立した書であったことが明らかとなる。都半仲が享保七年までには師の許を去って一派を興し独立していること、享保九年には、初代一中が七十五歳（寛文十年に二十一歳として）で没していることを考えあわせると、老来、力の衰えた一中と、その門下において鬱勃たる野心を示しはじめた半仲との微妙な力関係の推移が旧刻の谷村版「都羽二重拍子扇」の成立事情に反映しているように思えるのである。

一中節浄瑠璃道行集（仮題）

半紙本一冊。替表紙。外題なし。内題なし。奥付なし。全三十一丁。各種刷り物の寄せ本。内容は次の通り。

「お七道行 一中正本^{八行}」^{三行}「三度笠相合籠道行 都半仲^{八行}」^{二丁}「高野山女人たう心中道行^{八行}」^{二丁}「助六道行^{九行}」

「わん久きやうらんみちゆき^{八・九行}」^{二丁}「しのゝめ道行^{八行}」^{三行}「松づくし^{十行}」^{一丁}「ねびきのかどまつ<sup>山さき寺次兵衛
ふじやあづま</sup>道行^{九行}」

「九行」^{三行}「やまめくり^{八行}」^{二丁}「出世の鉢木最明寺道行^{八行}」^{三行}「人丸姫道行^{三行}」^{二丁}「半七三かつ心中道行^{八行}」^{三行}「おなつか

さ物ぐるひ道行^{八行}」^{三行}「けいせいししのぶ草^{七行}」^{二丁}「祇園のうれん茶屋名よせ^{十行}」^{三行}「石垣茶屋名よせ^{八行}」^{二丁}

以上の十六曲で、「けいせいししのぶ草」の二丁目ウの末尾に「ゆしま天神女坂 さがみや新板」と版元が記してある。この曲は、「正徳元年一中節段物集」にすでに収録されており、一中の江戸下り以前の語物であるが、江戸の版元からも正本が出版されていたものである。

この段物集で注目されるのは、「高野山女人たう心中道行」「人丸姫道行」という、これまでの段物集に見られない曲が収載されていることである。前者は宝永七年の近松の「心中万年草」下巻より詞章を流用し、後者は松本治太夫の正本「鎌倉袖日記」第三段の「人丸姫道行」の詞章を借りたもので、若月保治氏は、「鎌倉袖日記」を宝永頃刊行と推定^注されている。この段物集により、この二曲を初代一中に關係する語物として加えることができた。

本書の成立年は不明であるが、都半仲の語物を収載しているところから判断して、旧刻の「都羽二重拍子扇」などとはほぼ同じ頃の成立と見られる。天理大学所蔵。

注 『古浄瑠璃の研究第三』

（未完）

追記

本稿を草するに当り、資料の閲覧その他、多大の御便宜をお与えいただいた岩瀬文庫、大阪大学、国立国会図書館、天理図書館、東京大学、東京芸術大学、東洋文庫、早稲田大学の関係者各位並びに愛知県の鈴木光保氏に心からの御礼を申します。